

## 「近代工業の先駆け」 大嶋商舎の器械製糸工場

宇都宮伝統文化連絡協議会員

柏村 祐司



明治42(1909)年発行(5万分の1地形図)

明治新政府は欧米諸国に追いつけ追い越せを合言葉に富国強兵政策を掲げ、殖産興業を図った。その先駆けをなし、明治初期の輸出産業に大いに貢献した製糸場が宇都宮にあつた。大嶋商舎による製糸工場である。

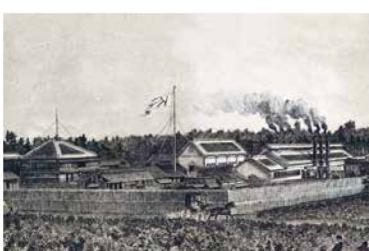
大嶋商舎が置かれたのは、旧河内郡石井村大嶋であり、創設等に関わったのは、川村迂叟、子の伝衛等である。迂叟は江戸の豪商で、宇都宮藩主戸田家の「山陵修補」の際、資金を無利息で融資し援助し、それにより戸田家から、禄五百石を贈られ、塩原村・船原が目指したのは、輸出

生村・石井村・桑島村・汎村一円が川村家の所管となつた。五百石を得た川村家では、桑園開拓に乗り出した。迂叟による慶応年間の石井村の開拓から始まり、明治二年の伝衛による石井村大嶋および東洋村開拓をはじめ明治七年の鐘山村字西川原開拓に続く。開拓した桑園の総面積はおおよそ七十五町歩(約七五㌶)におよんだ。

川村家の開拓は、桑園の設置だけにとどまらなかつた。明治三年に蚕室二棟を建設したのを皮切りに、明治四年四月には製糸試験場と蚕室一棟を建設した。この製糸試験場は、通称石井製糸所と呼ばれ、欧洲の器械を模し、人力ではあつたが、初めて製糸用の器械が工場に設置されたのである。製糸所の規模は、繭から糸を紡ぎ出す糸釜十二基、工女十五人、男工三人、製糸機二十二台である。工女は先に前橋製糸所に派遣し技術を習得させた。

用生糸の一環生産であった。その後も大嶋商舎は、次々と新しい施設、機械を導入し、工女を増員するとともに技術指導を徹底するなど工場の近代化を進めた。明治六年には蚕室二棟、貯糸庫一棟を設置。明治七年には製糸所一棟を増築するとともに水車を動力源とした四十八の双縄車を導入、工女九十人、男工二十三人に増員、年間三、七八六斤余(二二七一キログラム)の生糸を製造。明治十年には蒸気釜、明治十三年には蒸気汽罐を設置。また、明治九年には、イタリアの有名な製糸家夫婦を招き、最新の技術指導を仰いでいる。

こうした近代化の結果、大嶋商舎の生糸は、国内外から注目を浴びた。明治九年にはフライデルフィアの万国博覧会、明治十年にはわが国の第一回内国勧業博覧会、明治十一年にはパリ大博覧会に生糸を出品、それぞれ賞牌・賞状を得、製糸技術の高さを世に示した。



大嶋商舎全景(栃木県立博物館所蔵)

この他、大嶋商舎で特筆すべきは、工女を大事に扱つたことである。「大嶋商舎製糸所定期修行工女規則」等に則り、工女に過剰労働・低賃金を強いることなく、福利厚生にも配慮し、年少の工女には裁縫・読書・算術等の教育および医員を常置し病気の際には治療をする等を実施した。前述の規則に「工女ノ奮励ニ係ルモノ最モ多シト云エシ」とあるが、工女の労力を高く評価したからに他ならない。

こうした大嶋商舎ではあつたが、明治三十三年川村家が開設した第三十三国立銀行の経営悪化に伴い、経営が他に譲渡された。大正四年には工場が閉鎖され、施設は富岡製糸工場に移され幕を閉じた。わずか五年間の創業であったが、迂叟が目指した創業の理念は、色褪せることなく現在にも通じる。